

学生のアウトリーチ活動 —体験塾センス・オブ・ワンダーin福富の例—

山崎博史・竹下俊治・難波久佳*
(2002年12月6日受理)

Outreach Activity of University Students: A Case of Experience Cram School, Sense of Wonder in Fukutomi

Hirofumi YAMASAKI, Shunji TAKESHITA and Hisaka NAMBA

Abstract. The experience cram school, sense of wonder in Fukutomi, started at Mitsuhashi in Fukutomi town in April, 2002. The school is carried out by the collaboration of the volunteers in the area and students of graduate school of education of Hiroshima University. This school is a playground on the third Saturday in every month for seventeen pupils in and around this area. The graduate students has played an important role in both making and practicing the program of activities which is regarded as an outreach activity of university students. The school is to be placed on one of the occasion of the various experiences to become a teacher for the student.

1. はじめに

近年、大学と地域の連携についてしばしば話題となっている。教員養成系学部にあつては地域との連携として多様な方法・形態が考えられるが、その中の一つとして、学生が地域に出向き、地域の人との交流・協働を通して、地域の児童・生徒の活動に関わることが挙げられよう。

このように、本来の場所とは異なる場へ出向き活動を行うことは、近年博物館などでも行われるようになっており、アウトリーチ活動と呼ばれている。博物館の“出前展示”という意味合いである。したがって、学生のアウトリーチ活動とは、学生による“出前授業”に似た活動ということになる。

ところで2002年度から学校週5日制が完全実施されている。これに関して学校や地域においては様々な対応、取り組みがなされている。広島県賀茂郡福富町においても、三橋地区の地域の有志により、「体験塾 センス・オブ・ワンダーin福富」が立ち上げられ、4月から活動が開始されている。この活動に当初から学生が参画し、単なる

“出前授業”ではなく、児童—地域の人—学生(大学)—地域の自然が一体となることを目指した活動が実施されている。このような学校外における様々な教育の場での体験は、個性豊かな教員を養成するという意味において、教員養成段階において必要とされていることでもある(岡東・熊丸, 2002)。

本稿では、「体験塾 センス・オブ・ワンダーin福富」について、参画した学生の活動を中心に報告する。

2. 体験塾 センス・オブ・ワンダーin福富 2.1 目的と経緯

体験塾「センス・オブ・ワンダーin福富」(以下、体験塾)は、広島県賀茂郡福富町三橋地区の有志9名が発起人として設立され、2002年4月から活動を始めている。その目的として、この活動への参加を呼びかけた資料には次のように記されている。すなわち小学生を対象に、[1]交流(自然との交流、世代間の交流、異文化交流など)、[2]コミュニケーション技術の養成、[3]地域

*体験塾センス・オブ・ワンダーin福富代表

を知る、を主な柱としている。

地域の有志がこのような活動を始めた背景には、2002年度より完全実施となった学校週5日制があった。兼業農家が多数を占める三橋地域にあって、子どもたちの土曜日の過ごし方に多少とも不安を抱く保護者は多く、この活動はそれに応えたものである。また、ここを校区とする小学校においても同様の危機感があり、こうした地域の活動が望まれていた。

こうした状況の中、体験塾発起人側としては活動のリーダーの確保ができ、一方学生としては体験活動の場を提供していただくという、双方にとって意義あることとして、学生が積極的に関わった体験塾、すなわち児童－地域の人－地域の自然－学生が一体となった活動を目指した体験塾が実施された。

表1 体験塾 センス・オブ・ワンダー in 福富の参加募集案内(抜粋)

対 象	……三橋地区小学校(保護者同伴の場合はその限りではない)
活動内容	……楽しく歌いましょう 川や野山を探検、調査、観察(生物、水、地形などなど)…の観察会、山歩きなど) 朗読、表現(話し方)、手話などの訓練 地域を知る(歴史、文化、生活、地理などなど…) お年寄りとの交流 異文化交流 他
日 時	……平成14年4月20日(第3土曜日) 午前9時半から12時半まで 以後毎月第3土曜日(ただし、7、8、12月は原則としてなし)
場 所	……福富町後谷集会所
費 用	……毎回500円(損害保険代、簡単な昼食代を含む)

2.2 参加募集

上述した目的の他、対象や活動内容、実施日時、場所および費用等(表1)を明記した参加者募集案内が作成され、小学校を通して児童・保護者に配布された。

2.3 実施概要

体験塾は、毎月第3土曜日の開催を基本として(夏休みを除く)、これまでに5回、後谷集会所およびその周辺で実施された(表2)。一日の活動は

「歌」、「その日の主な活動」、「ネイチャーゲーム」および「昼食」から構成されている。時間は9時30分に始まり12時30分に終了する予定であったが、多くの場合、終了時間は13時を過ぎていた。参加児童数は17名(12名：女子の内数、以下同じ)である。学年の内訳は、1年生2名(1名)、2年生7名(5名)、3年生5名(3名)、4年生3名(3名)、5年生0名、6年生1名(1名)であった。また参加学生は広島大学大学院教育学研究科博士課程前期1年の12名であった。

「歌」は、1学期の間は「ビビデバビデブー」を、2学期には「お魚天国」を塾の歌として皆で合唱した(表2)。講師は地域外の人が担当した。なお、このような児童全員で一緒に行う活動を全体活動と呼ぶことにする。そのほか、各自で行う個人活動およびグループを作って行うグループ活動がある(表2)。

「その日の主な活動」は、季節や地域の特徴を考慮してメニューが作られた。メニューの検討は次のように行われた。すなわち、初回分については体験塾代表の難波と大学側の山崎および竹下によって決められた。2回目以降については、参加学生から募集した提案を基に体験塾側との協議のうえ決定された。その中での子どもの活動形態は、基本的には活動メニューによって決まるものであるが、はじめは個人活動が主体であったが、後半はグループ活動をすることが多くなった。

「ネイチャーゲーム」は1979年、アメリカのナチュラリスト、J.コーネル氏によって考案された、自然や環境を、ゲームを通して楽しみながら体験し学ぶゲームである(降旗、1992)。五感を使って地域の自然に触れ合うネイチャーゲームは、自然との交流という体験塾の目的に沿う活動と考えられることから、ネイチャーゲームが体験塾の活動に取り入れられた。体験塾でのネイチャーゲームは、初級指導員資格を持つ学生と地域外の人が指導者として参加し、季節や参加者の実態を考慮して実施された。なお体験塾の活動に参加した学生のうち2名は、ここでのネイチャーゲームの体験をきっかけとして初級指導員資格を取得した。そしてこの2名は、体験塾後半では、指導者に加わってネイチャーゲームを企画・実施した。

「昼食」は、ボランティアとして体験塾に参加している地域の人に作っていただいたカレーライ

表2 体験塾 センス・オブ・ワンダーin福富の実施内容

実施日	活動内容	児童の活動形態	学生のかかわり	地域の人のかかわり
2002年4月20日	1. 歌 (ビビデバビデブー)	全体活動		
	2. 休耕田での植物観察 ○植物の採集・観察し、スケッチする。 ○ニックネームをつける。	個人活動	指導・支援	休耕田の使用許可・材料準備
	3. ネイチャーゲーム ○わたしは誰でしょう? ○カモフラージュ	全体活動	指導・支援	
2002年5月18日	1. 歌 (ビビデバビデブー)	全体活動		
	2. 土の観察 ○水の実験 ○空気の実験	個人活動	指導・支援	
	3. 野菜の植え付け ○チョロギとエゴマ	個人活動	支援	畑の準備, 苗の準備, 植え付けの指導
	4. 田植え	個人活動	支援	田の準備, 苗の準備, 植え付けの指導
	5. ネイチャーゲーム ○フィールドビンゴ	全体活動	指導・支援	
	6. 絵日記	個人活動		
2002年6月15日	1. 歌 (ビビデバビデブー)	全体活動		
	2. 川での生き物探し ○川の様子を観察 ○生き物探し ○観察結果の発表	グループ活動	指導・支援	生き物採集の補助
	3. ネイチャーゲーム ○コウモリとガ	個人活動	指導・支援	
	4. ホタルかご作り	個人活動	支援	材料準備・製作指導
2002年10月26日	1. 歌 (お魚天国)	全体活動		
	2. 雨量計作り	個人活動	指導・支援	
	3. ネイチャーゲーム ○はじめまして ○宝探し	全体活動	指導・支援	
	4. 稲刈り	全体活動	指導・支援	作業の準備
2002年11月16日	1. 歌 (お魚天国)	全体活動		
	2. 山登り ○樹木調査 ○古墳・山城跡の見学	グループ活動	指導・支援	古墳・山城についての解説, 道案内
	3. ネイチャーゲーム ○読み聞かせ ○同じものを見つけよう	全体活動	指導・支援	

スやおにぎり弁当をいただいた。

以下では、「その日の主な活動」について、各回の概要を記述する。

【4月20日】

後谷集会所から徒歩で約10分の場所にある休耕田に移動し、植物の観察を行った。学生の代表が活動の説明をした後、児童は個人活動として植

物を観察し、最後にその結果を皆に紹介した。観察は休耕田の中の植物をよく見て、気に入った植物のスケッチを行い、さらにそれにニックネームをつけた。また、そこで採集した植物を集会所に持ち帰り、図鑑を使って名前を調べた(図1)。

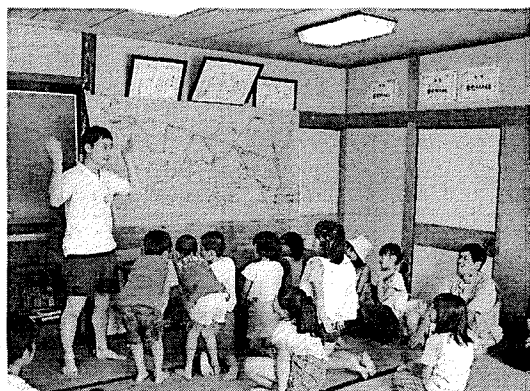
児童の多くは花をつけた植物に興味を持ったようである。また活動の主体は植物観察であったが、児童は植物だけでなく、カエルやクモなどの小動物



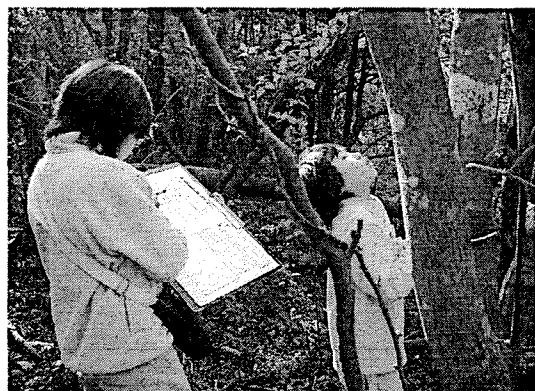
1. 歌



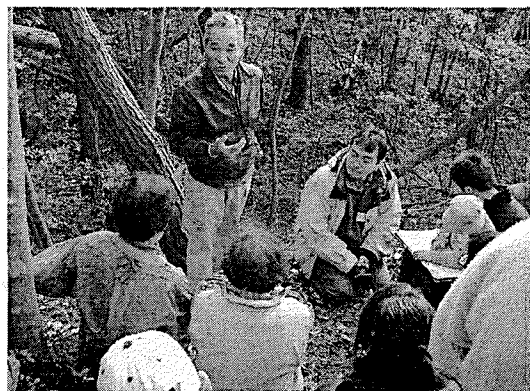
2. 植物の名前調べ



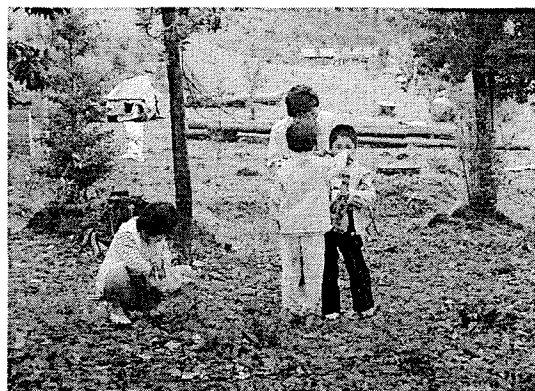
3. 川の生き物探しのまとめ



4. 山登り(樹木調査)



5. 山頂での地域の人のお話(山城跡について)



6. ネイチャーゲーム

図1 体験塾での活動の様子(写真:中村勝氏)

など自分の興味に基づいて自由に活動していた。

学生は、特に担当の児童を決めないで、各自が多数の児童に接しながら、児童の活動の支援に当たった。

【5月18日】

地域特産の野菜であるチョロギとエゴマの植え付けおよび休耕田での田植えが、地域の人の指導のもとで行われた。また、植え付け等の作業の前に、野菜や稲を育む土の特徴について考えるため

の簡単な実験が、学生の代表によって演じられた。児童はそれを見ながら、気づいたことをワークシートに書き込み、学生はそれを支援した。

野菜の植え付けと田植えは、児童および学生がそれぞれ希望する活動に分かれて行った。今回はじめて田植えを経験したという児童と学生が数名いた。

【6月15日】

この地域を流れる川(水路)での生き物探しを行った。児童および学生が3グループに分かれ、それぞれのグループが、この地域の最上流部にあたり、前回田植えをした休耕田の付近、後谷集会所付近、および三橋地域の最下流部で活動した。

活動は、学生の代表による水の流速に関する実験(ふねのかげっこ)と川の様子(川岸は何でできているか、どんな植物があるか、川底には何があるか)の観察を初めに行い、その後児童が川に入って生き物を採取した。流速に関する実験は、ペットボトルで作った船を川の左右両側と中央部の3カ所の水面に浮かべて、船の流れる速さを比べるというものであった。しかしながら、川とはいっても実際にはコンクリートの三面張りが施された幅2mほどの水路であったため、実験を実施できないグループもあった。

生き物採取は、学生や地域の人の支援を受けながら、児童が網を使用して行った。採取した生き物はその場で種類分けし、一種類につき数匹をバケツに入れて集会所に持ち帰り、他のグループの人に紹介した。そして最後に、生き物リストを地図上に書き出し、狭い範囲ではあっても3地点で大きな違いがあることを確認し合った(図1)。また採取した生き物について、これまで見たこともない物もいると驚いた地域の人も少なからずいた。

【10月26日】

夏休みおよび都合で実施できなかった9月を含めて4ヶ月ぶりの体験塾の再開であった。当初は体験塾初めての雨天ということで、1学期以来雨プログラムとして学生が用意していた、雨量計作りを行った。

この活動は、初めに学生の代表が降水量(雨量)の意味について解説した後、児童各自がペットボ

トルを使って雨量計を作成した。カッターナイフとはさみを使っての工作であり、学生は、特にケガを回避することを中心に支援した。

作成した雨量計を使って雨量の測定をする予定であったが、雨量計ができあがる頃には雨は上がっていた。それでも屋外に雨量計を設置して、次のネイチャーゲームと稲刈りを行った。結果的には雨量は0であり、児童への印象は弱いものとなってしまった。

稲刈りについては、これまで未経験の児童は作業そのものにも興味をもって取り組んでいた。一方学校や家庭において経験済みの児童は、自分が知っていることを人に教えるという行為にも楽しみを感じていたようである。どちらにしても稲刈りという行為にのみ注意が向き、実りの状態等に興味を示す児童は希であった。学生の支援も安全面にのみ注意が向いていたようである。

【11月16日】

三橋地区の地形は、東西からの尾根が迫った狭窄部にあたり、東西それぞれのピークには、15~16世紀には山城が築かれていた。またそれ以前の古墳も地域内に点在していることが知られている。こうした地域の歴史の概略を地域の方から伺った後、山城のひとつである松田城趾がある、後谷集会所東側の446m峰に登った(比高約70m)。

登る際、児童は2~3名のグループを作り、樹木の太さと立ち枯れの状態を調査した。調査は1本のロープを使って3種類の太さ(10cm~20cm, 20cm~25cm, 25cm以上)の木の本数とそのうち枯れている木と枯れていない木の本数を確かめていくという内容であった。

この調査は比較的単純な作業であり、学生の支援によって要領を得ながら、児童は自分たちでスムーズに調査を進めることができた。

調査が終了したところで各グループの調査結果を報告し合った。活動の中で、今回初めて定量的なデータ収集を試みたわけであるが、その意味付けについての支援が不足して、児童の理解は十分とは言えなかったようである。

頂上付近には古墳と松田城趾があり、地域の方に周辺を見渡ししながら解説していただいた(図1)。その他、子どもの行事(春の節句)として昔はこの山に登っていたという話を伺った。

3. 学生のアウトリーチ活動としての体験塾

体験塾に参加した学生には、毎回、その日の活動に関する自由記述式の感想・意見および次回以降の活動内容の提案の提出を求めた。また体験塾に児童を送っている保護者には、11月16日の活動(本年最後の活動)後、感想をお寄せいただいた。以下では、それらをもとに、体験塾での学生のアウトリーチ活動について、「活動への関わりの意義」、「継続的な関わり」および「異年齢集団」の3つの視点から整理する。

【活動への関わりの意義】

学生は授業の一貫として体験塾へ関わった。この授業では、児童と実際に接しながら、野外活動の計画や実践を体験することを目標にした。

1回目の活動では、学生は、主に活動の進行と児童の活動の支援を行った。2回目以降は、活動内容の検討も含めて、学生が体験塾により深く関わるようになった。

学生の活動への関わり方の中で、参加児童との関わりについての概略は次の通りである。すなわち初回の活動では、「久しぶりに子どもと一緒にいられて楽しかった」、「子どもたちとのふれあい、また自然とのふれあいによっていろいろ経験でき、勉強になった」との感想に表れているように、実際に野外に出て自然に触れあうことや小学生と接することを素直に楽しんでいる学生の様子が伺えた。また一方では「子どもたちの発想とわれわれ成人との発想において、大きな違いがあることに気づきました。」、「子どもたちの独特の感性には、驚かされるばかりでした。」また「子どもたちと様々な体験をして、とても大きなギャップを感じました。」と述べられているように、自分との比較を通して子どもを良く観察しており、体験塾が学生自身の学びの場でもあることを意識している者もいることがわかる。このような視点をもった学生は、2回目では「非常に興味深かったことは同じ題材でも子どもたちの描く情景の視点が全く異なるということです。ある子どもは、全体の風景を客観的に描いていたり、またある子どもは自分の目で見た稲の苗を植える様子を主観的に描いていたりしていました。…略…学校の教室という場は皆同じようにいすに座り、ノートをとっているのですその子どもたち一人一人がそれぞれ思

考を行っていることを忘れがちですが、当然のことではあるけれども、「子どもたちの異なる視点」を改めて垣間見ることができました。」とも述べている。

また自然との触れあいに関して「いくつかの植物についての性質・特徴などをテキストや図鑑などを用いて見知っていましたが、実物を手に触れて観察し、調べてみるという行為はそう多くありませんでした。」あるいは「一つの休耕田の中に、何種類もの植物が咲いていて驚きました。」という感想が述べられている。理科専攻の学生でありながらも、野外での自然体験に関しての個人差が大きいことが伺える。これについては、理科の中での専攻領域の違いによるところが大きいと考えられるが、それ以外にも日頃からの身の回りの自然に対する意識の違いも影響していると思われる。どちらにしても、学生の自然体験不足はこれまでも繰り返して指摘されていることであり(たとえば鳥越ほか, 2001; 山崎ほか, 2002など)、体験塾は、参加児童のみならず学生にとっても直接体験を経験する場として、意義あるもの考える。

【継続的な関わり】

学生のアウトリーチ活動には様々な目的やそれに応じた方法・形態が考えられる。そのような中で、この体験塾の特徴は、参加児童がほぼ一定していること、および継続した活動であることが挙げられよう。それは不特定の対象に対して単発的に実施する、いわゆるイベント的な活動との違いである。

体験塾の活動を通して、参加児童にはいくつかの変化が認められる。すなわちリラックスした状態の中でも秩序がある程度守られるようになってきたことである。たとえば活動中での悪ふざけが少なくなってきた。また、大学生と気を許してじゃれあって遊んでいる姿をみせる反面、大学生の指示には素直に従っている。さらに、自然への関心が具体的になってきたことである。それは、4名の児童(体験塾に参加している児童3名とその同級生1名)が、夏休みに「川をきれいにしよう!」という手書きのチラシを全く自主的に作り、自分たちで三橋地区の各戸に配布したことに示されている。このチラシには、☆ゴミをすてない、

☆生きものがすめるようにコンクリートをなるべくつかわない、☆川をきれいにしたら、ホテルもうまれるよ、と記述されている。こうした行動の背景には、学校での学習活動が基本にある事は言うまでもないが、それに加えて体験塾の活動を通して継続的に地域の自然に意識しながら触れていることが影響していると指摘できよう。特に夏休み前の6月、実際に自分たちの住む地域の川に入って、川の様子を見たりそこに棲む生きものに触れた経験は大きかったのではなからうか。

一方学生は、児童との接し方について、1回目では「どの児童がどのような性格なのかははっきりわからなかったのも、児童に対する接し方が中途半端になってしまった」という記述に代表されるように、やや戸惑いもあったようである。しかし2回目には「2回目ということもあって、子どもたちも警戒することもなく自然に私たちに話しかけてくれたと思いました。」「2回目の会ということで、はじめからリラックスして参加できました。」あるいは「2回目ということで、子どもたちとより近くで接することができたのではないかと思います。」と述べられているように、学生は少し余裕をもって児童と接することができたようである。3回目以降の感想の中では、こうした児童への対応に関する記述はみられない。このことは、活動を通して参加者の中に一体感が生まれてきたと見ることができ、子供たちの変化とも通じるものである。

【異年齢集団】

体験塾は児童、地域の人および学生から構成されている。当然その年齢構成は多様となっている。児童についてみても、1年生から6年生までの男女が混在している。このような異年齢の集団は、それ自体が児童にとっては学校の授業とは違う環境であり、保護者の感想にある「学校ではできないことを習い楽しむ」活動を生み出す素地となるものであろう。

しかしながら、異年齢集団での活動を実りあるものにするためには、それなりの工夫が必要となる。実際、「異なる学年が存在する中で、1年生に対して、4年生に対して同じ物をもとめるのは無理があると考えました。」あるいは「高学年の子どもたちと低学年の子どもたちの活動内容が

同じでありましたので、もう少し、工夫がいったような気がします。」という記述に見られるように、学生はこのことを強く意識していたようである。その点について、体験塾の活動での学生の対応を以下で整理したい。

学生の対応の仕方は大きく2つに分かれる。一つには、児童は同じ活動を行うのであるが、学生自身の中で低学年と高学年とに異なる目標を設定して児童に接し、指導・支援するというものである。たとえば、学年に関係なく生き生きとして行った川の生き物探しでの魚採りの場合である。低学年児童には、まず自然に触れることを主体にして、魚に集中させた。一方、中・高学年児童に対しては、多様な生き物がいることを気づかせるために、魚の種類に注目するよう、活動を支援した。その結果、低学年児童は、汚いと思っていた川の中に生き物が棲んでいることを認識し、高学年児童はたくさんの種類の生き物がいることに驚いていた。

二つめの対応の仕方として、目標を同じところに設定し、低学年児童の活動を高学年児童や学生が指導・支援するというものである。この点に関して「今回の体験塾で私は小学校低学年の発達段階を完全に誤解していた事が分かりました。彼らは理解するまで時間はかかるものの、その後は各々の役割を分担し円滑に作業できるのです。低学年だからといって1から10まで手取り足取り教えていくのではなく、始めに子どもたちが理解するまでは丁寧にその手法を教授し、子どもたちが理解した後は、支援のほうに回るべきだということをも身をもって実感しました。」という学生の感想は興味深い。また、「このような体験塾では、出席者の年齢層も幅広いため、何かを指導するというになると、難しいことを敬遠し、どうしても低学年に合わせてしまいがちです。しかし、年齢層が幅広いことを有効活用すれば、多少難しいことでも、年下の子が、年上の子や指導員にわからないことを聞いて、そして、年上の子が教え、学びあう……というようなく学びの輪」ができます。この〈世代交流の学び〉というのは学校教育にはできない社会教育や生涯教育(生涯学習)の場であるこの体験塾によってできる一つの醍醐味なのではないかと思えます。ですから、低学年にとってこの内容は多少難解だから……と言って敬

遠せず、〈学びの輪〉をつくるための資源として……と、少し考え方を転換することもできるのではないかという余地は残されているように思います。」という意見は、体験塾のあり方への提言として十分に検討されるべきであると考えます。今後、児童－地域の人－学生(大学)－地域の自然が一体となった活動を持続させるためにも、「その日の主な活動」への地域の人々の参画による学びの環の広がりが求められる。そうすることにより、体験塾は、児童はもちろんであるが、学生自身の体験の場、学びの場としての意義が深まると共に地域の人にとっても地域を再発見する場として展開できるものと考えます。

4. まとめ

大学と地域の連携の一つの方法として、学生が地域へ出向いて活動するアウトリーチ活動を実施した。この活動は、児童、地域の人および学生が、地域の自然の中で継続的に協働して行われた。地域の活動への学生の参加は、地域の人にとっては地域での学びの環を広げることになり、また、学生にとってこの活動は、個性豊かな教師となるための多様な体験ができる場の一つとして位置づけることができよう。

5. 謝辞

この体験塾の活動を実施するに当たり、福富町三橋地域の方々、とりわけ体験塾のボランティアの方々には大変お世話になった。また、歌の指導では神崎久美子氏に、ネイチャーゲームの活動では植村伊裕、山崎直子の両氏にお世話になった。大学院の学生の方々には積極的に児童と関わり、活動内容を検討いただいた。また、中村 勝氏には写真を提供いただいた。以上の方々に、記して感謝申し上げます。

6. 文献

- 降旗信一, 1992, 親子で楽しむネイチャーゲーム. 善文社, 171p.
- 岡東壽隆・熊丸真太郎, 2002, 教師教育経営試論(6)－教育実習としての「社会教育施設体験」の意義 2－. 学校教育実践学研究, 8, 15-21.
- 鳥越謙治・大谷修司・舟木賢治, 2001, 自然観察プログラムについての一考察. 学校教育実践学研究, 7, 57-64.
- 山崎博史・林 浩三・浅野敏久, 2002, 参加型体験活動とエコミュージアム－志和堀手作りミュージアムを例として－. 学校教育実践学研究, 8, 43-48.